



Title	巻頭言 大阪大学低温センターだより第139号
Author(s)	河原崎, 修三
Citation	大阪大学低温センターだより. 2007, 139, p. 1-1
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/10227">https://hdl.handle.net/11094/10227</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

河原崎 修三

34年間の大阪大学での奉職を終えて、この春無事定年退職致しました。その間、液体ヘリウムを使わない仕事は思い当たらないほど、低温とは深い縁の研究生活でした。低温センターを創設し、かくも効率的なシステムを完成された諸先輩、現役関係者の皆様のご努力の成果を存分に享受させて頂きました。皆様に心から感謝致す次第です。

80年代に、アメリカの研究所で新しい低温装置の立ち上げに携わった時の事ですが、最初の段階で深刻な真空漏れの事故に見舞われました。日本での感覚から、これで半年は吹っ飛ぶと覚悟したのですが、なんと翌日のうちに研究所のマシンショップが修理を終えてくれました。月に人間を送り込む国の、科学技術の中の組織力、チームプレーの素晴らしさの一端を見た思いでした。お陰で、1年足らずで所期の成果を収めることが出来ましたが、これを日本でやっていたら、10年かけても成功しなかっただろうな、と思いました。それ以来、研究支援システムというものの、これが私の理想のイメージになっています。

大阪大学の低温センター、工作センターは日本の大学では最も高いレベルのセンターです。大きな研究所と比べても高い技術力と効率を備えていると思いますが、それでも欧米の大学や研究所とは、大きな差があります。かの国々では、サイエンティストは、ひたすら頭を絞ることに専念出来る（専念することを強られる）環境があります。一方で、とりわけ法人化後、日本の大学の先生は多忙を極めています。この国では、一体誰が本気で頭を絞ることを許されているのだろうかと考えてしまいます。科学を自前で作り上げた国々と、科学を輸入することから始まった国との、考え方の違い、だとは思いますが、この差はいつか克服しないと、本当の意味で科学の一流国にはなり得ない、と思っています。世界をリードする研究には、実験技術において、或いは理論的理解や考察において、必ず、妥協を許さない、限界まで突き詰める試行錯誤の姿勢があります。そして、そのような研究には、優れた技術支援システムが不可欠です。スイッチ操作だけでデータをはき出してくれる出来合の実験装置を購入するだけでは済まない仕事です。

阪大の低温センター、工作センターが、今後も発展を続けられるかどうか、大げさでなく、この国の基礎科学の発展を占うバロメータのような気がしています。今後、多くの困難が予想されますが、阪大オリジナルの研究をサポートすると共に、研究支援システムのあり方を世に問うためにも、諸兄のご健闘を期待し、ご発展を祈らずにいられます。

最後に、今一度、皆様から賜ったご厚誼に感謝して、この号の巻頭言とさせていただきます。